

異教科で協働できる教員を育成するための実践的研究（2）

－異教科が協働する授業づくりへの「広大モデル」提示を目指して－

研究代表者	柳瀬 陽介（英語教育学講座）
研究分担者	岩坂 泰子（初等カリキュラム開発講座）
	檜葉みつ子（英語教育学講座）
	北臺 如法（数学教育学講座）
	木村 彰孝（技術・情報教育学講座）
	黒坂 志穂（健康スポーツ科学講座）
	草原 和博（社会認識教育学講座）
	鈴木 明子（人間生活教育学講座）
	田中 秀幸（技術・情報教育学講座）
	蔦岡 孝則（自然システム教育学講座）
	徳永 崇（音楽文化教育学講座）
	濱本 恵康（音楽文化教育学講座）
	深澤 清治（英語教育学講座）
	三根 和浪（造形芸術教育学講座）
	村上かおり（人間生活教育学講座）
	八木健太郎（造形芸術教育学講座）
研究協力者	横田 和子（目白大学）

I 研究の背景と目的

1. 本研究の概要

社会の高度知識化が進行し専門知の獲得が困難になる一方、社会が直面する諸問題は複数の領域での高度な専門知が絡む複合化したものとなっており、現実世界での問題解決はますます困難になっている。異なる分野の専門家が連携しながら問題解決するコミュニケーションは決して容易ではない。そこでさまざまな中等・高等教育機関で異分野間でコミュニケーションを取れる人材を育成する試みが少しずつ始まっているが、教育界の先導的存在であるべき広島大学教育学研究科（以下、本研究科）は、そういった流れに対して学識と経験に基づく指針を示さなければならない。

本研究科は、平成 28 年度での教育学研究科再編成に伴い新設された教科教育学専攻において、異教科で協働できる教員を育成するための共通科目を四科目開設した（「教科教育学研究方法論」、「教科教育融合プロジェクト」、「教科教育学の実践的展開」、「教科教育学の実践的検証」）。この共通科目の運営と効果の検討は昨年度の共同研究プロジェクトで開始され、その成果は本研究科のホームページで公表している。

これらの共通科目が完成年度を迎える平成 29 年度に行われた本共同研究プロジェクトは、昨年度のプロジェクトを継承し共通科目の検討を続けると共に、二年目で見えてきた新たな可能性も探究した。その成果の概要はこの報告書で以下伝えるとおりであるが、そ

の内実は本年度末（三月末）に同上ホームページですべて公開する予定である。

本研究は五部構成で合計 17 編の論考をもつ（この「本研究の概要」と最後の「今後の課題」を含めるなら 19 編）。「Ⅰ 研究の背景の目的」は本研究の概要を示した上で、10 の教科をもつ「教科教育学」全体について考察した論考を二編もつ。「Ⅱ 総括的な報告と分析」は共通科目を今年度実施運営するにあたって取りまとめ役となった教員がそれぞれ担当した科目についての成果と課題点を明らかにする四編の論考からなる。「Ⅲ 教科別の報告と分析」は、固有の教科の立場から共通科目について検討する論考を二編有する。「Ⅳ 異教科の協働からの論点」は、テーマに興味をもった異教科の教員間で行った四つの対話に基づき、創造性・「リアル」な教材・理系教科での英語使用・国語科と英語科の連携などについて考察した九編の論考によって構成される。最後の「Ⅴ 今後の課題」の今後の研究の方向性を示した。これらの論考により、自らの教科の専門性に基づきながら他教科の教員とも協働し、問題がますます高度化し複合化する現代社会に対応できる生徒を育てる教員の資質を高めることが本研究の目的である。

2. 教科教育学の二つの意味

「教科教育学」とは何だろう。それは「数学、音楽、国語・・・」などのさまざまな教科に関するそれぞれの教育学を、変数 x を使って総称する「 x 科教育学」という意味だろうか。確かにそのような意味で「教科教育学」という用語が使われる場合もある。しかし、この小論では、「教科教育学」を「複数の教科の学びを学習者の中で連動させるための知識・技能体系」と定義して、広島大学大学院教育学研究科の教科教育学専攻での共通科目は、「 x 科教育学」を深めるだけではなく、複数の教科を連動させる「教科教育学」を学ぶ機会ではないかと提言する。

3. それぞれの教科の中の科学と物語

日本では強力な「文系か理系か」という区別は、それぞれの教科を「文系」「理系」「それら以外」に分けてしまい、学習者の自己認識もその三つのどれかにしてしまいがちであり、教科教育と学習者の可能性を狭めてしまう区別であるように思える。この小論では、心理学者のブルーナーの物語様式の科学規範様式概念区分を使って「文系」と「理系」の概念内容について再考し、それぞれの教科には物語的側面と科学的側面の両方があるのではないかと問題提起する。

(柳瀬陽介*)

Ⅱ 総括的な報告と分析

1. 2017 年度の「教科教育学研究方法論」のとりまとめを行って

教科教育学研究方法論は広島大学大学院教育学研究科で開講される科目であり、中高等学校の様々な教科の教育を専門とする学生と一緒に学ぶ共通科目である。2016 年度に始まったこの授業で学生から聞こえてきたのは、各教科に関するテーマに統一性がないことに対する不満や、なぜこの科目を学ばなければならないのかといった意義に関する疑問であった。しかし、これだけ多くの教科を専門とする学生を前にして、その統一性を取り学ぶ意義を伝えることは本質的に極めて難しい問題である。2017 年度に本科目のとりまとめを

行うにあたって、この問題についてどのように考えたのかをまとめる。

(田中秀幸*・蔦岡孝則)

2. 初年度の「教科教育融合プロジェクト」を終えて

本授業においては10の各専修の院生が四つの複合的な知の領域に分かれて活動した。各教科の枠組みを越えて教材開発を行うことを通して、教科教育の現実的問題について協働的に探求し、多角的な課題設定および問題解決能力を涵養することを目標とするものであった。しかし、実際の活動においては、各グループが主体的かつ協力的に参加し、中等学校レベルで活用できる総合的教材を開発を行う上で教科教育の各教科の枠組みを越えて多面的、複眼的に探求することは、非常に困難であることが理解できた。改めて、その困難を乗り越えるために、各教科の教員による授業内容・意義における相互理解を深めておくことが重要である。

(濱本恵康*・深澤清治)

3. 「教科教育学の実践的展開」の概要と実際

「教科教育学の実践的展開」では、導入・中間・最終の三段階のシンポジウムにおいて、各教科の本質を追究し教科教育実践の原理を探る中で、各教科の共通性と差異性について協議した。各段階のテーマは「各教科の意義・固有性」、「各教科の見方・考え方」、「各教科ならではの深い学びにつながる授業実践とは？」であった。本稿では、院生及び教員による各段階のプレゼンテーションの概要と協議の実際を示すとともに、数学科・英語科・家庭科・音楽科・美術科の院生による本授業の成果に関する記述に基づいて、来年度の「教科教育学の実践的検証」につなぐテーマを探った。

(鈴木明子*・檜葉みつ子・三根和浪)

4. 「教科教育学の実践的検証」の概要と実際

本稿では、「教科教育学の実践的検証」の授業実践について、フィールドワークを実施した八つの教科（理科・数学・社会・国語・英語・家庭・音楽・美術）の教科ごとの実践研究の概要と、多様な実施形態が取られたフィールドワークの実際を記述した。実践研究の概要については、「実践研究の構想発表会」と「実践研究の成果発表会」で報告された内容を、フィールドワークの実際については、参加した八教科の中から英語・家庭・美術の例を示した。

(檜葉みつ子*・鈴木明子・三根和浪)

Ⅲ 教科別の報告と分析

1. 「教科教育学研究方法論」における現職教員とストレートマスターの学生による学びについて－技術・情報教育学専修に所属する学生を対象に－

本年度、技術・情報教育学専修では現職教員とストレートマスターの学生が「教科教育学研究方法論」を受講した。それによりストレートマスターのみによるものとは異なる学びを展開することができたのではないかと考えている。そこで、本稿では技術・情報教育学専修の学生を対象に、現職教員とストレートマスターの学生が共に学習することにより

得られた学びについて、学生の振り返り（Bb9）やレポートを基に検証する。

（木村彰孝*）

2. 「教科教育学研究方法論」の意義と成果—人間生活教育学専修受講生の分析から—

他教科専修の院生との対話の積み重ねによって、自らの教科についての理解を深めることができただけでなく、広く深い考え方ができるようになった。またそのことが彼らの自信となり、教員採用試験合格という成果として表れた。今春から現場で実践的研究力を備えた教員として活躍することを期待したい。

（村上かおり*）

IV 異教科の協働からの論点

1. 創造性の育成と評価のかたち—音楽と美術、英語の対話から—

音楽科と美術科はともに創造性あるいは感性を豊かにすることが期待される教科でありながら、実際に創造性を育むことができているのかどうかという点では、不十分な点があるように思われる。今回、音楽科・美術科・英語科の教員による対話を行い、創造性の育成とその評価のあり方について、意見を交わした。その結果、創造性を育む上での問題意識として、創造性の定義、表現教育と鑑賞教育のバランス、歴史の流れの理解、評価のあり方、といった点において、共通の認識があることが明らかになった。

（八木健太郎*・徳永 崇・柳瀬陽介）

2. 「創造性」を育む音楽史教育

この度、「共同研究プロジェクト」の一環として、八木健太郎氏（造形芸術教育学）の話題提供の下、柳瀬陽介氏（英語教育学講座）を交えて対談を行った。話題の中心となったのは、「創造性」についてであり、その育み方や評価の方法など、現状の問題点も含め、様々な視点から討議がなされた。その際、美術と音楽の分野に共通する問題意識として、歴史教育の重要性が指摘された。「創造性」と「歴史」という、一見すると関連性を見落としがちな事項であるが、創作の現場に立つ者にとって、両者は不可分の関係にある。近年、学校教育において「創造性」の涵養が問われる中、音楽科における音楽史教育の果たす役割について考察したい。

（徳永 崇*・八木健太郎・柳瀬陽介）

3. 創造性を一元的な評価の対象にしてはいけない

この小論では、一元的な評価が創造性をかえって阻害しているのではないかという問題提起をおこなう。論証のために、一元的な「評価」と多元的な「体感」とを概念的に対比させる。また「創造」の無限定性と制限性、社会性と歴史性も確認した上で、一元的な評価は技術的な側面だけに限定するべきであり、創造性に関してはさまざまな人が多元的にそれぞれの発表を体感できる開かれた場に自分の作品や表現を提示することができたか合格か不合格だけを判定するだけに留めるべきであることについて論じる。

（柳瀬陽介*・徳永 崇・八木健太郎）

4. 音楽科の教材にタブーはあるのか？

世界には多様な音楽が存在している。しかし、音楽科の教材として取り上げられるのは、ごく一部であることはいうまでもない。それならば、その取捨選択の基準はどこにあるべきなのであろうか。この点に着目する契機となったのは、「教科教育学研究方法論」における草原和博氏（社会認識教育学講座）の講座である。そこでは、親の離婚や破産、デート DV、詐欺商法など、実生活と密接に繋がっていながら、社会科の教材としては取り扱いに配慮の求められる内容について考察がなされた。このような一種の「タブー」が、音楽科においても存在するのか否かについて考察しつつ、教材の可能性について言及したい。

（徳永 崇*・草原和博・黒坂志穂・柳瀬陽介）

5. ナマモノの教育的意義

筆者は「教科教育学方法論」の講義で、「解雇」「冤罪」「いじめ」「デート DV」「貧困」をテーマにした自作公民教材を紹介した。受講生に投げかけた問いはこうである。「この教材集は実社会に根差した、子どもにとってリアルな危機ばかり扱っているにも関わらず、現場の教員は一部の教材について指導を諦めた。なぜ教師はそれを教えがたいと感じたのだろうか」と。教室空間と社会空間、子どもの日常と大人のシステム、親密圏と公共圏、これらを架橋するリレバンス＝有意味性の効いた「ナマモノ」は、誰もが魅力を抱くテーマだと、筆者は信じて疑わなかった。しかし、実際はそうではなかった。

上のエピソードを同僚教員に紹介したところ、同様にナマモノを描いた映画『TOKYO TRIBE』と公民教材をネタに、「ナマモノ」を教室で取扱う意味を議論したいとの希望が寄せられた。英語、社会、音楽、身体パフォーマンス、これら教科の専門性を異にする者が同じ映画を見て語る企画に心が震えた。なぜならその過程に、プロフェッショナルとしての問題関心と知見が、そして個人としての生活経験と規範が複雑に交錯し、投影されることが、想像に難くなかったからである。多様な視点から映画に意味を付与していく過程は、各教科の教員が協働でディスコースを読み解き、学校カリキュラムをデザインしていく過程とも重なる。本稿ではこの過程を再現し、ナマモノに接する作法と畏怖を論じたい。

（草原和博*・黒坂志穂・徳永 崇・柳瀬陽介）

6. 異教科・異分野融合の試みの中で新たに出てきた萌芽的なアイデア

実生活上のリアルな問題（ナマモノ）を孕んだ映画『TOKYO TRIBE』を題材にした会に参加させて頂いた。現代日本の文化は腐敗気味であり、下品で画一的なものが多く、「ナマモノ」も、そうした生活の中に混在している。しかし、「ナマモノ」の度合いは人それぞれで、少なくとも現代社会では選択し、変えることができる。そのため、「ナマモノ」を教材とするなら、一緒に美しいものやとびっきり情緒にあふれたものを紹介したい。そうすることで、生徒にどのように在りたいかを考えさせたい。どのような状況下でも、「選ぶことができる」ということを伝えたいし、選択の幅は、考えているよりも広く、現在の状況は関係ないのだと伝えるきっかけができればと感じた。

（黒坂志穂*・草原和博・徳永 崇・柳瀬陽介）

7. 科学系教科と芸術系教科における「リアリティ」

教室と現実の間には深い溝がある。教室で学習者は学んでいる内容にリアリティ（実在性・実在感）を感じる事ができず、教科書はしばしば現実にある不当な出来事や不条理性を巧みに回避することも珍しくない。この小論では、教科教育にとっての「リアリティ」についての三つの論点を提示する。第一の論点は「リアリティ」の捉え方が科学系教科と芸術系教科で異なることである。科学では実証性と確定性において「リアリティ」を描き出そうとするが、芸術では対照的に事実独立性や象徴性において「リアリティ」を描きだすことを指摘する。第二の論点として、どんな教科であれ共通項として人権に対する配慮が必要であることを指摘する。第三の論点として、格差が広がりつつある現状において「エリートによるエリートの教育」といった考え方もつ危険性について懸念を表明する。

（柳瀬陽介*・草原和博・黒坂志穂・徳永 崇）

8. 数学教育学講座院生との対話から考える英語による授業のあり方

この小論では、三名の数学教育学講座大学院生および一名の数学教員との対話に基づき、三名が大学・大学院および中学校・高校で経験した英語の学習と使用に関する認識を明らかにした上で、(1) 数学教育を英語で行うこと、(2) 「理系の言語」と「文系の言語」のあり方、(3) 専門教育と学校教員として必要とされる力の違いなどについて考察する。少人数の経験からの過剰な一般化は避けるべきかもしれないが、急速に英語化しようとしている日本の学校教育について考えるための一つの手がかりを提供したい。

（柳瀬陽介*・北臺如法）

9. 「国語科と連携」した小学校外国語教育に関する一考察—言語意識教育の視点によることばの学習・発達—

本プロジェクトの一環で、横田和子（目白大学）による『「にほんご」』（1979 初版、谷川俊太郎編集）を通して、国語教科書と市民性形成を考える」と題した話題提供があった。この会では、国語科教育と英語科教育、そして日本語教育という言語教育分野の参加者らが、学校教育におけることばの学習活動や教材のありかたについて話し合った。本稿では、横田（国際理解教育・言語文化教育）・岩坂（小学校外国語教育）が、新指導要領において、特に強調されている英語科と国語科教育の連携の意義とことばの教育の可能性について考察を深めたい。

（岩坂泰子*・横田和子*・柳瀬陽介）

V 今後の課題

上記のように本研究は、専門性を大きく異にする複数の教科の教員が協働する共通科目を教える際の困難点や課題を五編の論考で示し、この協働の中から生まれてきた四つテーマについても九編の論考で考察を深めた点で、一定の成果をあげたといえる（もちろんその成果の検証は、2018年三月末から公開されるホームページをアクセスする関係者それぞれによってなされるべきである）。

しかし、サブタイトルで示した「広大モデルの提示」については、まだまだ達成できて

いない。授業開始から二年目でまだまだ経験が不足しているということもあるが、共通科目を設計した当初に掲げた「革新性と持続可能性」(innovation and sustainability)のバランスを保ち理想を追求しながらも現実的に運営可能な授業モデルを他所に提言するためには、自らの実践者をいわば外部者の目で眺めるような分析・考察・記述が必要である。

最後に一つの懸念を表明しておく。現在、広島大学も含めた多くの大学で教員の業績の可視化が叫ばれ、「スピード感」をもって教員の業績を単純な数値にする改革が進行中である。そのような数値は、たいていの場合、可視化されやすい指標(たとえば一定の学術誌に掲載された研究論文の数など)になりがちであるが、もちろん大学教員の仕事はそういった指標だけに集約できるものではない。時代に対応する科目を作りだすこの教科教育学専攻の試みは、その革新性ゆえ多大な時間と労力を必要とする。だがそれらは容易に可視化・数値化されるものではない。本プロジェクトの取りまとめ役としては、そのような共通科目を担当するだけでなく、このような共同研究プロジェクトにも参加してくれたメンバーに厚く感謝する。だが、献身的な努力をしている若手メンバーが、「この試みは大変に有意義だと思うのですが、他方で業績指標ばかりを求められると、このプロジェクトに費やしている時間を専門の研究論文執筆に費やすべきではないのかと複雑な思いになります」といった趣旨の発言をふとした機会に漏らしたことを忘れることができない。

考えてみれば大学も、目的も内容も方法も大きく違える多数の専門分野が集まっている機関である。それらが協働し社会に対して効果的に貢献するための手段を、実行可能性(practicality)や信頼性(reliability)の点ばかりでなく、妥当性(validity)の点からも考え開発し改善する必要があるのではないか。この異教科の教員が協働して、革新的でありながら持続可能なやり方で授業を開発・運営するプロジェクトの経験が、これからの大学のあり方についてわずかでも活かされてゆけばと願っている。

(柳瀬陽介*)